我やどの梅の初花ひるは雪夜。るは月かとみえまがふ哉

〔枕草子一〕夏はよる、月のころはさらなり、やみもなをほたるとびちがひたる、雨などのふるさへおかし、

〔徒然草下〕夜に入て、物のはへなしといふ人、いと口おし、萬の物のきらかざり、色ふしもよるのみこそめでたけれ、ひるはことそぎ、およすげたる姿にてもおりなん、よるはきらゝかに、はなやかなるさうぞくいとよし、人のけしきも、よるのほかげぞよきはよく、物いひたるこゑも、くらくて聞たる、用意ある心にくし、匂ひも物のねも、たゞよるぞひときはめでたき、さしてことなることなき夜うち更て、まいれる人の、きよげなるさましたるいとよし、わかきどち、心とゞめて見る人は、時をもわかぬ物なれば、ことにうちとけぬべきおりふしぞ、けはれなくひきつくろはまほしき、よき男の日くれてゆするし、女も夜更るほどにすべりつゝ、鏡とりてかほなどつくろひて出るこそおかしけれ、

神佛にも、人のまうでぬ日、夜まいりたるがよし、

〔萬葉集四相聞〕二年〇神龜　乙丑春三月、幸三香原離宮之時得娘子作歌一首幷短歌、

笠朝臣金村

今夜之早開者、爲便乎無三、秋百夜乎、願鶴鴨、

〔萬葉集抄六〕この歌、古點には、こよひのはやくあくれと點ず、古語には、このよらのといへり、男聲をよぶ故成べし、

〔類聚名義抄十一〕夜半ヨナカ〳〵

〔源氏物語四夕顔〕ひとめをおぼして、へだてをき給よな〳〵などは、いと玄のびがたく、くるしきまでおもほえたまへば、〇略下